

宇野弘蔵教授を囲む研究会

段階論を巡る研究会記録

馬場 宏 二

研究会記録「『経済政策論』について」は、宇野理論体系展開史の一駒を示す、これまで知られなかった貴重な資料である。宇野体系は、経済学は、原理論・発展段階論・現状分析の三段階からなるとするが、それを巡る問答記録のうち、意外に少ないのが発展段階論を主題としたものである。本誌に掲げたのは、段階論でも立ち入った問答が行なわれたことが一度はあったことを示す記録であり、極めて興味深いものと言える。

1. 宇野の対談と座談

宇野三段階論の大枠は、戦前、宇野の東北帝国大学時代に形成されたが、細部まで整理された体系として全貌を表わし、社会科学論に敷衍されたのは、戦後の東京大学社会科学研究所時代である。マルクスを継承しながら革命的斬新さを示した理論体系が、独特の文体と相俟って多くの研究者学生を魅了し、宇野の語りや文章よりはるかに解かり易いこともあって、東大停年ごろから、数多くの対談や座談会記録が出版された。退官時の座談「経済学四十年」¹⁾を含む『経済学を語る』、一橋大学での教え子との対談を主とする『経済学の効用』、諸大学での講演やいくつかの対談を集めた『資本論に学ぶ』と三つの UP 選書²⁾がある。また、戦中派の門下生が分担執筆し問い手となった『演習講座 経済原論』³⁾、

1) 「経済学四十年」『社会科学研究』、9巻4/5号 1958年2月

2) 『経済学を語る』1967年、これに、佐藤金三郎・高須賀義博との対談「とくに段階論について」を含むが、段階論の内容の検討ではなく方法論である。『経済学の効用』1972年、主たる対談の相手は関根友彦。『資本論に学ぶ』1975年。以上三冊、いずれも東京大学出版会、UP選書。

3) 『経済原論』(経済学演習講座)青林書院、1955年。参加者は、大谷瑞郎・鈴木鴻一郎・玉野井昌夫・戸原四郎・長坂聡・日高普。

東大大学院の演習生相手の「経済学ゼミナール」全三巻⁴⁾、これと多分に重なる原論学者相手の大冊『資本論研究』全五巻⁵⁾、そして法政大学定年時の『資本論五十年』上下⁶⁾が代表的である。晩年の梅本克己との対談『社会科学と弁証法』⁷⁾も逸し得ない。今年になって、『宇野弘蔵著作集』に収録されていない遺作を集めた『「資本論」と私』⁸⁾が出版されたが、中心を占めるのは「経済学の方法について」という講演と質疑応答であり、司会者斎藤仁が保持していた⁹⁾。これも当然算入できる。

さて、論題から推測できるが、対談座談の主題はほとんど、宇野理論の体系・方法か、宇野『経済原論』もしくは『資本論』の検討である。前者は当然発展段階論に触れるが、それは方法論の一環としてであり、段階論自体の内部構造や主要論点に立ち入って論じた例はない。そもそも段階論や宇野『経済政策論』を主題とした研究会自体があまりなく、記録が出版されたこともなかった。だから、宇野理論史を心得ているはずの、いわゆる宇野学派の人々も、その種ものは世に存在しないと考えて来たのである。

もっとも、宇野抜きで段階論研究会の記録なら存在する。東大『経済学論集』掲載の「帝国主義論と原理論をめぐって」¹⁰⁾と、雑誌『経済学批判』宇野弘蔵追悼号の第二部「段階論」¹¹⁾である。しかし前者は、岩田弘提唱の世界資本主義論が学派に強い衝撃を与えた後、当時の現役教授間で、それを是とする諸氏と非とする諸氏とが行なった論争であり、後者はヨリ下の世代の間で、主に段階論と現状分析の関連を論じたものであって、宇野『経済政策論』講義ノート¹²⁾の紹介等興味深い論点が多々含まれるが、やはり『経済政策論』そのものの内部構成や論点把握を議論の中心課題にしているわけではない。

-
- 4) 1『経済学の方法』, 2『価値論の問題点』, 3『恐慌論・商業利潤論の問題点』, いずれも1963年。参加者は降旗節雄・岩田弘・大内秀明・桜井毅。
 - 5) 『資本論研究』全5冊, 1967~68年, 筑摩書房。参加者は降旗節雄・大内秀明・桜井毅・山口重克・鎌倉孝夫。
 - 6) 『資本論五十年』上下, 1970, 1973年, 法政大学出版局。訳き手は, 時永叔・日高普・渡辺寛・桜井毅他。
 - 7) 宇野弘蔵, 梅本克己『社会科学と弁証法』, 1976年, 岩波書店。
 - 8) 『「資本論」と私』, 解説桜井毅, 2008年, 御茶ノ水書房。
 - 9) この記録は, もともと斎藤氏から筆者が拝借した。
 - 10) 「帝国主義論と原理論をめぐって」『経済学論集』29巻3号, 1963年10月。出席者は, 鈴木鴻一郎・楊井克己・武田隆夫・遠藤湘吉・大内力(司会)。
 - 11) 『経済学批判』宇野弘蔵追悼号, 1977年9月。第二部「段階論」, 出席者は戸原四郎(報告)・森恒夫(司会)・柴垣和夫・佐々木隆雄・中村通義・林健久。
 - 12) 1946年度東北帝国大学「経済政策論」の講義ノートが中村通義の手元にあり, 中村の紹介によると, 第三編帝国主義(二)金融資本としての重工業は, (1)ドイツに於ける独占組織の発達と(2)アメリカ合衆国における独占組織の発達からなる。著書『経済政策論』では, ここが第三編帝国主義第二章金融資本の諸相, 第一節ドイツにおける重工業を中心とする独占組織の発達, 第二節イギリスにおける海外投資, 第三節アメリカにおけるトラスト運動と変わった。因に中村は1936年の講義と述べているが, 1936年のノートは見当たらず, あるのは1946年のノートだけだから, 1946年の言い誤りであろう。

2. 存在した研究会記録

だが『経済政策論』を巡る研究会の速記録のコピーが、戸原四郎の遺品の中に残されていた。もっとも、戸原を含めて討論参加者は、そのレベルの議論は卒業したつもりだったのか、内容ばかりか研究会があったこと自体忘れていたらしい。筆者は宇野経済学入門以来の半世紀余、諸先輩からその件を聞かされた記憶が全くない。戸原が保存のために整理した速記録コピーを戸原夫人が故人の遺品中から発見したのが昨年、手書きの、読み難い文書なので、整理かたがた清書を始めたのが昨秋以降と聞く。その経緯は、戸原つね子「宇野『経済政策論』研究会記録について」でご覧いただく。筆者は速記録の発見を、戸原演習生だった加来祥男や工藤章から伝え聞き、面白いものだから早く読みたい、広く読ませるために解説清書をどんどんお進め下さいと、発見者が同じ大内力演習の先輩である気安さから、遠慮なくお願い続けた。氏の細心で大量な煩勞によって、この研究会記録が成ったのである¹³⁾。

研究会が開かれた経緯は以下のようなものだったようだ。1950年代半ば、宇野経済学つまり三段階論を具体化する経済学シリーズが企画された。『経済原論』上下は以前に出版され研究も進んでいた。新企画の主たる狙いは、二年ほど前に出版された『経済政策論』の具体化であり、結果的には東京大学出版会刊の、宇野弘蔵監修『経済学大系』全8冊として結実した。すなわち、原理論・段階論・現状分析の三段階に応じた、宇野弘蔵著『経済学方法論』、鈴木鴻一郎編『経済学原理論』上下、武田隆夫編『帝国主義論』上と遠藤湘吉編『帝国主義論』下、楊井克己編『世界経済論』と大内力著『日本経済論』上下。

察するに、段階論具体化に当たっては理論的困難が山積していた。中心は段階論の頂点である帝国主義段階論をどう構成するのだが、その前に、出版後間もない宇野『経済政策論』をどう消化吸收するか、そこに示された、自由主義段階と帝国主義段階との異同、金融資本の概念やその実態と帝国主義政策との関連、主役として分析対象となるドイツ・イギリス・アメリカ三国の特徴付けなどが問題だったろうから、執筆予定者諸氏は、『経済政策論』を学び理解を定着させる過程と、上記各種の疑問の発生とが交錯した、刺激的だが落ち着かない期間を過ごしていたに違いない。

だが企画を進めるには理解の統一を図る必要がある。初めに編者クラスに戸原助手を加えた相談会が開かれたようだ。そのことはこの研究会記録も示唆しているが、それ自身の

13) おそらく、速記録本体は宇野の手元に渡っていたのであろう。参照、戸原つね子「宇野『経済政策論』研究会記録について」および前掲『経済学批判』同上号167～169ページ（石井和夫発言）。

記録はないらしく、成果も乏しかったという¹⁴⁾。そこでまもなく、宇野を軸とし、中堅・若手を含めた本格的な『経済政策論』研究会が改めて開かれた。集まったのは、監修者宇野、各巻編者の武田、遠藤、楊井、鈴木、いずれも東大経済学部教授（大内力は海外留学中）と、記録に名前が出た九人の中堅・若手で、こちらはほぼ助教授か助手身分だったが、戸原はドイツ金融資本論の著作¹⁵⁾を執筆中で、企画の中心となる知識を貯えていた。石崎はアメリカ金融資本研究¹⁶⁾を志しており、世界経済論にも知識が及んでいた。森は博士課程の学生だったが、後にイギリス資本主義論の単著を出版する¹⁷⁾。最終的に九人全てが『帝国主義論』上下の執筆者となったが、こうした、企画の根本に関わる知識の蓄積から、この三氏が主要部分の担当者となって行ったと見られる。

実は筆者も上記『世界経済論』の執筆者である。だがそれは、この巻の人手不足が明白になって楊井・石崎が補充を図った際に急遽動員され、加藤栄一とともに修士論文合否未定の内に、専攻テーマが近いとして例外的に追加されたためである。だから既にこの全体的研究会が行なわれていたことは全く知らず、また、別途巻ごとの打ち合わせや研究会があったことにも気づかなかった。『世界経済論』だけの会として宇野が出席した研究会があったが、その記録はない。印象に残っているのは、宇野が、世界経済論には農業問題が大事だと、楊井の枠にない主題を、極めて遠慮がちに指摘していたことだけである¹⁸⁾。

3. 討論の概要

あれからちょうど半世紀、研究会参加者は大部分故人になった。宇野を始め出席した諸教授は誰もいない。中堅若手九人で健在なのは、石崎、森、藤村（本稿成稿後逝去）、徳永の四氏だけ。当事者でない筆者には、一層臨場感を掴み難くなっているのだが、健在諸先輩の記憶も借りながら、以下、討論概要をごく大まかに示す。

本来、筆者による内容紹介は本格的でなくとも良い。問答記録が客観的な形で提供されれば、読者銘々に資料として読み、掘り下げ得る。この記録の出現は、議論不足で来た段階論を巡って改めて議論を起こす機縁になる。国権社会主義体制が崩壊してグローバリズム時代となった今日、段階論の成果はどこまで生きるか、既成の段階論の構成をどう変え

14) 戸原の遺したメモ（参照、戸原つね子前掲稿）と石崎の伝聞の記憶とによる。

15) 戸原四郎『ドイツ金融資本の成立過程』1960年、東京大学出版会。

16) 石崎昭彦『アメリカ金融資本の成立』1962年、東京大学出版会。

17) 森恒夫『講座帝国主義の研究4 イギリス資本主義』1975年、青木書店。

18) 参照、宇野弘蔵『資本論五十年』1051ページ。

るべきかなど興味津々の課題が山積する。この問答記録は、そうした課題に面した際、多くの示唆を与える。立ち入りたい論点が多々あるが、細かく取り上げると紙幅を費やす上に、筆者自身の解釈や志向に偏った個人論文になる危険がある。だから当面、資料をいわばドライに提出することを最優先し、内容解説としては、宇野体系に不馴れな、あるいは多忙な、読者のために、ごく大まかな特徴を示すに留める。後日、この資料が各種の議論を誘発すれば、論者の一人としてその議論に改めて参加したいと思っている。

さて問答は、武田の、金融資本の諸相か典型かと言う問題提起から始まる。この問題は宇野帝国主義論の根本に触れており、そのため結局、後の武田自身による再論や藤村による整理方向の示唆を含んで、全討論の基調になる。しかもこの論点は、宇野のドイツ典型論が鮮明なだけに、それとの種差を示しつつ帝国主義としてドイツと対抗する基盤となったイギリス金融資本の特徴や、宇野が、トラスト形成を金融資本の特徴として捉えながら帝国主義政策の方は実相を明示しなかったアメリカの捉え方に、しばしば飛び火する。

この武田の問題提起に対して、宇野がすぐ、かなり長目に対応しているが、これは宇野が思考の内面を露わしたものとして注目に値する。まず宇野は、重商主義的対立を持ち出す。帝国主義的対立を、一方では前段階の国際対立と対比し、他方では帝国主義を植民地支配と諸帝国間対立とに区分した上で対立の面に絞る。双方の視角を重ねて帝国主義的対立、ひいては第一次世界大戦の特徴を掴もうとするのである。段階論的発想の根本を語った回答であり、この後の討論の中で誰も重商主義に言及しなかったばかりか、もっと後の宇野学派諸氏の具体的分析の中にも、本格的な重商主義論や本源的蓄積論が現れていないことを想起すれば、その重要性はいっそうきわ立つ。植民地支配に関わって、宇野が植民政策の講義を結構重視していたことにも留意しておいて良い。もう一つ注目すべきは、短絡的金融資本仕掛人説が既に覗いていることだが、この点は後で取り上げる。

典型・諸相論の基調の上で、イギリス金融資本とイギリス帝国主義、さらにアメリカ金融資本が論ぜられた。典型的ドイツ金融資本は、株式会社制度を媒介にして銀行と産業が結合し、重工業に独占体を形成する。これに対して、イギリス金融資本は海外投資の形を採る¹⁹⁾。アメリカ金融資本は同じく株式制度あるいは証券資本主義を基礎としながらトラ

19) 上掲註12)で示した、イギリス金融資本を重工業から海外投資に括り出した変更を、宇野自らも研究会で語っている(本誌169-170ページ)。この発言箇所は解説がやや難しいので、戦前の講義について語っているようにも読めるが、戦前の講義ノートは見当たらず、今のところ、「経済政策論」が三編構成になったのは1930年代前半だろうと推測できる(参照『資本論五十年』420ページ)程度である。ここに示された「三編構成」と現物の1946年のノートとでは、密度が違うから直接比較はできない。戦前の講義の構成が、多少変更されたことはあったにしても、ほぼそのまま1946年のノートに現れ、それが1954年の『経済政策論』になる時に変更されたと考えるのが素直であろう。46年ノートの金融資本の章にイギリスの節は現れず、序論的な金融資本一般論の中で、イギリス産業の株式会社化が、発展力ある海外投資に押されて困難になったとの解釈が、やや及び腰ながら指摘されている。

スト形成の形を採る。この金融資本論では、三国それぞれについて豊かな知識が示されたのが印象的である。中堅若手はそれぞれの専門家だから当然だが、宇野自身が事実に関して豊かな知識を持ち、自ら唱えた理論的命題を保持しつつ、この豊かな知識によって各種の疑問に答え、しばしば予想外に柔軟な対応を示してもいる。

ところが、経済政策や帝国主義的対立といった側面については、宇野自身に、それ以上に参加者諸氏に、知識不足や、ともすれば金融資本をそのまま帝国主義と言い換えるような経済主義的発想があったと見える。経済学者の集団だからやむを得ない面もあるが、宇野がここでは、口頭による気安さのためか、金融資本と帝国主義を著書論文におけるよりはるかにナマに直結していて、あたかも帝国主義は金融資本なる悪玉勢力の世論操作によって起こると言わんばかりの発言を繰り返したのに対して、疑問が投げられることはあっても、史実や論拠の検討等根底的な詮索にまでは遂に及ばなかった。

イギリス帝国主義について宇野が、自由貿易帝国主義とか公式・非公式帝国といった概念によれば適切に掴み得る現象を事実上捉えていながら、それをイギリス金融資本＝海外投資の動向で説明し切ろうとした無理は、内的経済主義によって疑問が抑制されていたせいか、取り上げられなかった。アメリカについては形式的不揃いが見えるから、戸原や石崎が何回か問い掛けたが、金融資本論に留まり、アメリカ帝国主義論には至らなかった。それが金融資本成立よりはるかに以前から続いたフロンティア開拓、近代化した白人勢力による内陸部異民族征服の延長に他ならないという、常識的歴史観は封じ込められ、すべてを金融資本から説明しようとして経済政策や帝国主義について具体的な叙述ができなくなった欠落は、指摘はされたものの、原因を掘り起こせないまま議論が閉じている。これは特に今日グローバリズムを把握するのに制約になる。宇野は第一次大戦後を見通す中で、アメリカ帝国主義のソ連への対抗は指摘した。だがアメリカの膨張力は、経済的強拡大性＝投機性を伴うため、単なる対ソ封じ込めを越える内圧を抱えていた。第一次大戦前の海外膨張もその現れに他ならなかったのである。

もうすこし細かい論点にも関わるが、問答最大の印象は、参加者諸氏が、『経済政策論』を近年学んだ新鮮な感覚をもって、極めて率直に疑問を投げ、宇野もまた極力率直にこれに答えようとしていることである。なぜ対外政策ばかり扱って対内政策を取り上げないのか、なぜ社会政策を問題にしないのか、金融資本の概念は証券資本主義ではいけないのかと、直截素朴ながら極めてもっともな疑問が投げられており、宇野はこれに、後の機会での段階論問答から見ると珍しいほど率直に対応している。無論、全てを解決したわけではなく逃げたところもあり、今日でもそのまま残る疑問や、その後の学說的進歩を踏まえて別の解釈をしたほうが適切な場合もある。農業問題や労働問題のように、『経済学大系』の中で取り上げられた課題もある。つまり、この問答の中には、後の目から見ると理論的

に低水準の部分がある。しかし、ここに示された、新鮮で素朴直截な関心は、理論の普及や洗練といった学派的制度化のなかで摩滅して良いものではなかった。それが維持されてこそ、宇野段階論がグローバリズム把握の方法であり得るのである。

4. 掲載の経緯

研究会速記録の発見解読がもう一年早くて、それを前掲『「資本論」と私』に含め得れば簡便で良かった。解読清書がもう半年早かっただけでも、昨 2007 年 12 月 1 日に行なわれた、宇野弘蔵没後 30 年記念追悼集会で、関心ある人々に公表し得た。しかしそれは望むべくもなかった。そこで解読清書がほぼ済んだ段階で、発表方法をどうするかを巡って、戸原夫人、石崎氏ら研究会参加者と筆者の間で、いくつかのアイディアが交換された。学術的に貴重なものだから出版したい。しかし単著とするには量的に不足で、それを補うに足る、未公表の文書が今は見当たらず、詳しい解説や論評を書くに最適の石崎には当面時間的ゆとりがない。結局、社会科学研究所と相談して見ようと言うことになった。議論の軸だった宇野も速記録保持者の戸原も、かつて研究所の所長まで勤めた、社研の研究体制上の中心人物だったし、その他の関係者にも研究所関連の人物が多いところから、『社会科学研究所』に発表できないかを、戸原夫人の意を体して筆者の口から訊ねて見ることにした。筆者在籍時から見ると同誌の編集方針がかなり変わったので、まずは掲載の枠があるかと尋ねたのだが、可能だと快く応じていただいた。ただ、筆者が解説を書くとは都合だとのお返事があったので、直接の当事者ではなく、いわば応援団に過ぎないが、強い関心を持ったものとして、この一文を草したのである。